

■ミニシンポジウム1■ CRC 業務上の工夫

座長：横手 さわな（熊本大学医学部附属病院 治験支援センター）

富田 里佳（医療法人社団 汐咲会 井野病院 病院ユニット診療支援部門）

演者：1. 訪問看護ステーションと連携した新しいネットワーク治験

五十崎 俊介（愛媛大学医学部附属病院 創薬・育薬センター）

2. RECIST ガイドラインにもとづいた固形がんの治療効果判定ソフトウェアの開発

岸本 容司（財団法人 先端医療振興財団 臨床研究情報センター 神戸 TRI）

3. 治験薬管理票に何を記載すべきか？～治験薬管理表の記載項目の標準化～

若林 宏樹（金沢大学附属病院 薬剤部）

4. 治験チームの構築をめざして～日本鋼管病院内部 CRC のあり方とは～

大森 ひろみ（医療法人社団 こうかん会 日本鋼管病院 治験管理室）

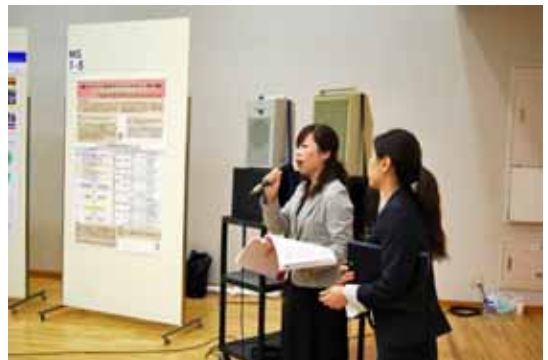
5. 治験コーディネーター室におけるバランスド・スコアカード（BSC）の導入

萩原 佐知子（財団法人 癌研究会有明病院）

【報告】

ミニシンポジウム1「CRC 業務上の工夫」は第2日目（2008年10月12日）第4会場・石川県立音楽堂交流ホールにおいて、8:30より開催されました。5名の演者の方々から、様々な場面における治験実施環境整備について工夫を凝らした事例について発表していただきました。

いずれの発表も、今後の治験業務を行う上で非常に有用となる事例であり、参加者からも積極的な意見を伺うことができました。



特に「治験薬管理表の記載項目の標準化」についての発表ではかなり活発な討論が展開され、依頼者から治験薬管理表への記載として求められる内容についてどこまで受け入れるべきか、疑問を持つ治験薬管理者が予想以上に多いことがわかりました。「訪問看護ステーションと連携したネットワークの構築」については、特殊な事例ではありましたが、実際に同様の治験を実施していて苦労しているといった意見が出たことで有益な意見交換がなされていました。

その他、「RECIST ガイドラインに基づいた治療効果判定のソフトウェアの開発」「SMO と業務提携をする際に確立した運用ルール」「バランスドスコアカードを用いた治験コーディネーター室の業務改善」についての発表がありましたが、いずれの発表に対しても実際に行うことを想定した上での質問が相次ぎました。こういった多くの疑問の声に対し統一した見解を培っていくためにも、質疑応答のしやすい規模で開催されるミニシンポジウムの果たす役割は大きいと感じました。

